

自由われらの園 国府高校100周年

「へ若人の歌にさかえよ
…から始まる国府高校の
校歌＝QRコード＝は、一
九五三(昭和二
十八)年に誕生
した。作詞は昭
和詩壇を代表する詩人で、
豊橋ゆかりの丸山薫が手掛
けた。

表会で、初めて全校に披露
された。記念誌によると、
作詞の丸山、作曲の山田昌
弘の両氏も出席していた。

「湧き出てくむ真理の泉」
「きらめくは倫理の新星」
…二年生だった元高校教
諭の土方親さん(へこ)＝豊川
市行明町＝は、発表会の中
で、ピアノの伴奏に合わせ
生徒全員で一節ずつ練習し
たことを覚えている。「ま
だ戦争の復興半ばで貧しい
家庭も少なくなかったが、
は」と想像する。

未来への希望があった。そ
んな新しい時代を表す言葉
が並んでいたように思っ
と振り返る。

一年生だった杉浦悦子さ
ん(へこ)＝同市国府町＝は、
その場で校歌一番の歌詞
「打ち建てゆかん 慧智日
本」という一節について、
歌い方の指導があったと記
憶している。

現在は世代によって「に
ほん」「にっぽん」と歌い
式や卒業式、体育大会とい

った学校行事や同窓会など
で歌われ、それぞれの思い
出とともに思づく。

体育館には、国府高四十
三回生が卒業記念品として
贈った校歌額が掲げられて
いる。当時の卒業生で会社
員の太田勝久さん(へこ)＝名
古屋市天白区＝は校歌を聴
くたびに、体育大会後のフ
アイヤー・フェスティバル
(通称フエ)で、仲間た
ちと炎がなくなるまで歌っ
た思い出がよみがえるとい
う。

「卒業して約三十年がた
った今も二番まで歌える。
たくさん同窓生に愛され
ている校歌だということを
感じながら、歌い継いでい
ってほしい」



肩を組んで校歌を歌う
生徒たち＝豊川市の国
府高で(同高提供)

歴史編④ 新校歌の制定

創立六十周年記念誌など
によると、このころの国府
高は男女共学化や豊川市立
高との統合を経て生徒数は
千人超になった。大学進学
率が上昇し、部活動では卓
球部が全国的な活躍を見せ
ていた。「生徒の心より
どころ」として、国府高等
女学校時代の校歌に代わ
る、新たな校歌が求められ
ていたという。

校歌は五三年十一月、真
新しい体育館で開かれた発

歌い継がれる希望の詩